

～読んでみない？こんな本～

サリーのこけももつみ

ロバート・マックロスキー文／絵 石井桃子訳 岩波書店



サリーとお母さんは冬に備えてジャムを作るため、こけもも山へやってきました。サリーがこけももを自分の小さなバケツに入れると、ポリン・ポロン・ポルン！といい音がします。一方、クマの親子も冬に弱らないようにするため、こけもも山へこけももを食べに来ました。ところが途中でそれぞれの親子は離ればなれになり、それぞれの子どもはお互いに違うお母さんの後について、こけももを採り始めます。サリーも子グマも同じように無邪気で、違うお母さんに会っても驚いたり怖がったりしませんし、こけももを食べることが大好きなもの一緒です。

人がクマに会うなんて一大事のような気がしますが、それはクマも同じようです。お母さんクマがびっくりした顔をしているのに、小さなサリーは無邪気な顔でこけももを集めている場面は、危ないというよりお母さんクマが困っているのが伝わってきてどこか同情してしまいます。

その後、それぞれのお母さんは、同じ方法で自分の子どもを探し出し、また一緒にこけももを摘んで帰っていきます。どちらのお母さんも落ち着いていて、子どもを大事にしている感じが伝わってきて、ゆったりとした時間が過ぎていくような絵本です。